

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

August 2012 vol.16



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「東京藝大美術館所蔵 日本近代美術の名品展 —森鷗外と米原雲海を中心に—」

名品とは何か

企画展「平成24年度国立美術館巡回展 国立西洋美術館所蔵 ヨーロッパの近代美術」

西洋近代美術界のアイドルたちが目白押し—ファッションにも注目!

コレクション展「重要文化財 益田元祥像」

益田の殿様、療養顛末記—文化財の修理について—

16



横山大観《村童観猿翁》明治26年

2012年10月6日(土)～11月26日(月)

休館日:毎週火曜日

開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)



A. 浅井忠《収穫》明治23年 重要文化財

B. 浅井忠《収穫》X線写真 「油画を読む 解剖された明治の名品たち」展図録(東京藝術大学大学美術館協力会発行 平成13年)より転載

C. 黒田清輝《婦人像(厨房)》明治25年

※作品は全て東京藝術大学蔵

名品とは何か

人との間に巡り合わせの不思議があるように、美術作品と人との間にも何かしらの深い縁を感じる時がある。大抵は「再び還ってくる縁」。幾重にも偶然が重なってのことだが、改めて考えると身震いがする。例えば美術に限ったことでなくてもいい。子供の頃に一度見たものを大人になってから再び見て、その時とは全く違う印象をもつ事がないだろうか。「あれ、こんなに小さかったっけ。」「ここにこんなものがあったかな。」おそらく実際に目線の高さが変わったように、視覚を通して感じとる心もまた成長と共に変化していくものなのだろう。これが美術作品だったら美術館との気楽なおつきあいにも結びつき、ひとつ人生の楽しみが増える。美術とは実は末永くおつきあいが出来る相手なのだ。

私の場合、今回の展覧会がまさしく「再び還ってくる縁」だった。この展覧会は森鷗外と米原雲海というふたりの郷土出身者に関連する絵画・彫刻作品を中心に、東京藝術大学の所蔵する名品を紹介するという内容で構成している。これらは教科書等でおなじみの作品群であると同時に、実は個人的にも馴染みの深いものが多い。私が同大学の院生だった頃、実は当時あまり作品の価値もよくわからず、先生に指示されるまま数人の学生達と油絵作品を縦にし、横にして写真

撮影をしていた。写真といっても特殊なもので、紫外線、赤外線、X線といった不可視光による光学調査である。これらは、主に作品修復の前の状態調査や、技法材料研究のために行うもので、普通の目では見ることができない絵の深部まで探ることができる。例えば紫外線蛍光写真からは絵画表面のワニス層の状態や後世の加筆部分などがわかり、赤外線写真では絵具層を透過し、下書きの層の木炭や鉛筆の線を観察できる。さらに透過力が深いX線写真では、鉛白を主成分にした白色絵具を使用した技法のほか、下層にある別の絵の存在が明らかになることもある。不可視光に限らず、普通の光をやや側光気味に当てるだけでも、絵は全く違う表情を見せる。それは油絵具の粘性を利用した刷毛や筆の勢い、絵具の厚さや薄さの差など、時間が経っても変わらない、いわば画家の息づかいの記録そのものである。この分野の研究成果で特徴的なものは、本展の出品作でもある浅井忠《収穫》(図A)の下層にあった全く別の絵の存在だろう(図B)。教官達の研究でこれは三重県伊勢市にある二見ヶ浦の夫婦岩の風景画であることが判明している※1。当時カンヴァスの再利用はそうめずらしいことではなかったが、前の絵の内容まで具体的にわかった例は数少ない。

また本展のポスターに使用している黒田清輝《婦人像(厨房)》(図C)に描かれた女性の上着は、黒の絵具を使用せずに、青や赤系の絵具を混ぜて作り出している色だということも判明した※2。黒をなるべく使用しない「紫派」の特徴がここにも表れている。

その後は、しばらく大学に残り、こうした作品の展示にあたった。そのたびに何度もこれらを繰り返し見てきたが、不思議と飽きることはなかった。「名品」の定義は定形がなく、捉え方次第で意見が大きく分かれるかもしれないが、世代を超え、時代を超えて長年人々の心を魅了し続けるこれらの作品を、私は自信をもって名品であるということが出来る。また、作品との縁だけでなく、人との縁も不思議に還ってくるものだ。昔お世話になった同大学と大学美術館、その他多くの方々のご理解と様々なご協力なしでは、本展は実現できなかった。改めて深く感謝の意を表するとともに、是非多くの人にこの展覧会を楽しんでいただきたい。

※1 坂本一道・佐藤一郎・歌田眞介ほか「明治前期基礎資料集成 東京藝術大学収蔵作品」(中央公論美術出版 平成3年)などで発表されている。

※2 歌田眞介・坂本一道・佐藤一郎ほか「東京美術学校西洋画科油画作品の研究I」『東京藝術大学美術学部紀要』31号(平成8年)などで発表されている。



図1



図2

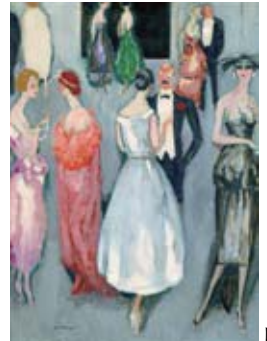


図3

図1. ビエール＝オーギュスト・ルノワール《ばらをつけた女》 1910年代頃

図2. パブロ・ピカソ《横たわる女》 1960年

図3. キース・ヴァン・ドンゲン《カジノのホール》 1920年

西洋近代美術界のアイドルたちが目白押し —ファッションにも注目!

モネ、ルノワール、ピカソ…美術に関心の薄い人でも一度は聞いたことのある名前だろう。こうした西洋近代美術界のアイドルと言っていい画家たちの作品が、東京は上野の国立西洋美術館から、この冬石見美術館に出張、集結する。国立西洋美術館は、フランス政府から返還寄贈された「松方コレクション」を収蔵公開する目的のもと設立された、日本で唯一西洋美術を専門とする施設だ。「松方コレクション」とは大正3年頃から昭和3年頃までの間、当時株式会社川崎造船所の社長であった故松方幸次郎氏がヨーロッパ各地で集めた絵画、彫刻等のコレクションである。それを元に美術館を作り、日本の若い画家たちに本物の芸術を見せてやりたいとの意気込みで収集された作品は質・量共に大変優れたものであった。1928年の恐慌により傾いた会社の財務整理に当たったため、1万点ともなっていたといわれるコレクションは散逸したが、400点ほどはフランスに残った。第二次大戦末期にはフランス政府の管理下に置かれたものの、日仏友好のしるしとして返還され、1959(昭和34)年、国立西洋美術館設立に至った。

今回の展覧会では、この「松方コレクション」を含む絵画、彫刻、版画全80点を展覧する。絵画では、ルノワールの《ばらをつけた

女》(図1)や、単純化された形態が面白いピカソの《横たわる女》(図2)、ノリの北西に位置するセヌ川に面した小さな町を描いたモネの《ヴェットイユ》、何気ない農村風景の爽やかな秋の様子をとらえたピサロの《エラニーの秋》、人間の本性を求めて繰り返し描いたとされるルオーの《道化師》…など、教科書で見かけたことのある画家たちの作品がずらりと列ぶ。

そんな中で、ファッションを収集方針の一つにしている当館として注目したいのは、ルノワールの《ばらをつけた女》(図1)と、キース・ヴァン・ドンゲンの《カジノのホール》(図3)だ。前者は晩年のルノワールが柔らかなタッチで描きあげた一枚。頭に赤い大輪のばらをつけた女性が、お茶でも飲んでいのか、スプーンでカップをかき混ぜながら、こちらに視線を向けている。顔はこやかに微笑んでいて、ほおには花のような赤みが差し、優しい。花の赤とは対照的に服や背景には青が使われ、それが画面を引き締めながら花の存在感を増すのに貢献している。本作は婦人像を制作の中心にとらえ、女性のもつ豊かさや暖かさを表そうとしたルノワールらしさのよく表れた作品といえよう。ばらはルノワールが好んで描いたモチーフであつたらしい。ばらは古来多くの人に愛され、それ故に「愛」、

「情熱」、「気品」、など沢山の花言葉を持つ花だ。そうした様々な思いを受け止めるばらに、ルノワールは女性そのものを重ね、繰り返し描いたのかもしれない。

後者はファッションブルな夜の社交界の様子が描かれた華やかな作品。女性たちが身にまとう紫、赤、緑などの色鮮やかなドレスが、灰色と黒とで表されたカジノホールに浮かび上がる。こうした街の情景や流行の衣装を描くことを1920年代のドンゲンは得意とした。女性たちの装いは1920年当時の気分をそのままに伝える。首周りの肌を多く出し、長いネックレスをつけ、上半身はコンパクトにまとめ、ふわりと長いスカートに、繭のように丸く大きなコートを羽織る。前景の人物と遠景の人物の大きさが極端に異なり、視点を高く取ることで、人物が重なりすぎず、美しい衣装が画面全体を程良く埋めるよう配置の工夫が見られる。人の内面よりも、装飾的な要素を捉えることを優先しているようだ。

華やかなこの作品にちなみ、「1920's 夜を彩る服」と題したコレクション展を同時開催(12月5日～2013年2月11日)し、同時代のドレスや、夜の社交界の様子を伝えるファッションプレートを展示する。併せてお楽しみいただきたい。

(廣田理紗 当館学芸員)

コレクション展「重要文化財 益田元祥像」

2012年10月31日(水)～12月3日(月)

休館日:火曜日

開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

益田の殿様、療養顛末記
—文化財の修理について—

平成22年度、当館所蔵の重要文化財、狩野松栄《益田元祥像》(図1)の修理を行った。益田元祥は益田氏20代当主。豊臣秀吉の文禄・慶長の役で武功をあげ、関ヶ原の合戦には西軍として参戦、敗戦後は毛利の家老となって須佐に移った。肖像画が描かれたのは、益田家が従っていた毛利氏が秀吉と和睦してから、絵師の松栄が亡くなるまでの間にあたる天正10～20年頃と考えられている。本能寺の変から文禄の役まで、といえはイメージしやすいだろうか。今からおおよそ420～30年前のことだ。

こうした肖像画は、日頃からどこかに掛けっぱなしということはなく、普段は大切にしまっておき、法要などの折に掛けたものと思われる。それゆえ4世紀以上経っても大きな破損はなく、遠目にはよく残っているように見えた。しかし近づいてみれば絹地には小さな裂け目があり、絵具もいつ剥落するかわからない危うい状態だった。国指定文化財なので国(文化庁)とも協議した末、本格的な修理を行うこととなった。しばらく展示室へのお出ましがなかったのは、そんな事情が

あったからである。

ところで文化財修理の目的は、ただ壊れた部分をくっつけるとか、画面をきれいにする、ということではない。絵具が落ちている箇所を色を塗り直すことはないし、作品を傷つけてまで汚れを落とすことは決してしない。一番の目的は、今残っているオリジナルの部分を維持することだ。無理な汚れ落としや若作りの化粧はせず、あくまでも老化の防止を行うわけだ。

掛軸といえは表具の裂が注目されがちだが、絵が描かれた絹の裏に補強のため重ね貼りされる、裏打ち紙にも注目してほしい(見えないけど)。紙はもちろん、これを接着する糊も、作品に悪影響を与えない天然のものが厳選される。そして重要なのは、次の修理で外すことができるようにしておくことだ。修理は永遠に効き目があるものではなく、百年、百数十年ごとに、衰えた部分を交換してゆく必要がある。よって糊には水溶性のデンプン糊が使われる。今回の修理でも、古くなった裏打ち紙を取り除く必要があった。そのためには水を含ませて糊をゆるめなくてはならない。ふやかしたからといってペロリとはがれるわけではないので、繊維を少しずつほぐしてとっていく。もちろんその前に、これ以上絵の具が落ちないように固定する処置も必要だ。絵の具の状態は場所によって違うので、細かく確認しながら進める。こうした周到な作業を経て、ようやく元来の画面だけの状態になる。そこから絹の破

れや皺をつくろい、新たに裏打ちをし、最後に表具をとりつけ、修理は完了する。……と、説明するのは簡単だが(しかもだいたい端折った)、作業にあたった技師のみなさんは、慎重に慎重を重ねながら何日も作品と向き合ってくださった。不器用でズボラな私には気が遠くなりそうな仕事である。

さて我々学芸員も、入院中の殿様を放っておいたわけではなく、何度か工房にお見舞いに行き、貴重な体験をさせてもらった。実はこの絵には「裏彩色」といって、絹地の裏から絵の具を塗っている部分がある。これは裏打ち紙を全て取り除いた状態でしか目には出来ない、つまり掛軸になってしまえば絶対に見られない、本当の意味での「裏側」だ(図2)。また、絹地のすぐ裏にあてるため画面の見え方を左右する「肌裏紙」の色の選択や、鑑賞に大きな影響を与える表装裂の選定もさせていただいた。少なくとも今後100年は殿様のお召し替えはないのだから、責任重大である。「殿様、カッコ悪くなった」と皆さんに思われなことを、切に祈っている。

ここで説明しきれなかったことについては写真や実物をまじえながら、コレクション展で紹介する予定だ。また11月24日(土)の14時から、修理に携わった文化庁の監督官と工房の技師を迎え、トークショーを開催する。この機会に文化財修理の大切さ、奥深さを知っていただきたい。

(川西由里 当館主任学芸員)



図1



図2

図1. 重要文化財 狩野松栄《益田元祥像》 当館蔵

図2. 肌裏紙除去中の写真。刀と馬の尻の部分。画面下3分の2は絹地が露出した状態で、白と赤の裏彩色が確認できる。(絵は横向き)